

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470600228		
法人名	医療法人 井上内科病院		
事業所名	グループホーム萩の家		
所在地	三重県津市久居井戸山町751番地1		
自己評価作成日	令和 3 年 10 月 26 日	評価結果市町提出日	令和4年1月14日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kajokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JigyosvoCd=2470600228-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 3 年 12 月 8 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

法人内に病院と介護老人保健施設を併設している。
 また、井上グループ内に介護老人福祉施設や居宅サービス、居宅介護支援事業所もあり、施設間の連携が保たれている。
 法人母体の医師が主治医であり、毎週1回の診察、健康管理をしている。
 日常生活はリハビリテーションを含んだレクリエーションや季節行事、近隣の中学校との交流を行い、皆さん生き生きと楽しく過ごされている。月2~3回の歌や踊りのボランティア訪問も通常は行っているが、コロナ禍でボランティア訪問は控えてもらっている為、利用者と職員で歌等日々行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所周辺は野菜畑・果樹園が広がり豊かな自然に恵まれている。直ぐ前には母体の病院や複数の関連施設があり、何かあれば直ぐに医師や看護師が駆けつけてくれる安心感がある。また、近くの中学校の生徒と以前から交流があり、生活部の生徒がコロナ禍であっても利用者いろいろな手作りの作品を届けてくれ、それに対してお礼の便りを返すといった交流は、利用者の大きな喜びとなっている。コロナ禍で例年通りの外出やイベントはできないが、せめてホームの中で楽しいこととして利用者の笑顔を見たいと、職員がいろいろなアイデアを出し合って室内での運動会や裏庭での食事会などを催しみんなで楽しんだ。6名の利用者と職員、そしてペットの愛犬は、家族のように共に時間を過ごし、一年毎にみんなで目標を立てて前向きに取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の中で、他人も「思いやる」事に重点を置いて理念としている。	立ち上げ時に掲げた理念は玄関とリビングに掲示し、思いやる気持ちを生活の基本としている。また、年度末に利用者と職員で次年度の目標を考え、その目標に向かって全員で取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍であるが、地域の方々が畑で採れた野菜を持参して施設に立ち寄り、利用者様に窓越しや玄関先から声を掛けて下さる。コロナ禍でない時は、立ち寄って下さった地域の方々と利用者とは話を楽しんでいる。	コロナ禍ではあるが、地域住民からの野菜の差し入れがある。また、中学校の生活部の生徒が手作りのプレゼントをしてくれ、受け取った利用者の喜ぶ姿の写真入りの礼状を返すなど温かい交流がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の中学校の生活部の皆様と交流をはかる為、例年は中学生の方々とともに共同作業で作品を作ったりしているが、コロナ禍である為、中学生の方々が壁画やキーホルダーを作成してプレゼントして下さり、利用者から手紙をだすなどしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、コロナ禍の為外部の方には書面参加して頂き、運営推進会議の内容に対し、意見書にて意見を頂き、次の回の運営推進会議にて改善報告等を行い、サービスの向上に活かしている。LIFEを用いた厚生労働省へのデータ提出フィードバックを活用したPDCAサイクルによるケアの質の向上に努めている。	コロナ禍のため、内部の委員のみで運営推進会議を2か月毎に開催し、外部の参加者には書面で報告した。意見書を同封し、受け取った意見書に対する回答を集約して返すなどきめ細かな配慮をしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議では、コロナ禍の為書面参加して頂き、運営推進会議の内容に対し、意見書にて意見を頂き、次の回の運営推進会議にて改善報告書、ホーム便りを送り、日常の利用者の様子を知らせ連絡を密にしている。	何かあれば主に電話で連絡し相談をしている。運営推進会議の報告書をもとに意見をもらい運営に反映させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に研修会を開催し、正しい知識を学び、身体拘束はしないケアに取り組んでいる。	3か月毎に身体拘束についての研修をし、その弊害について知識を深めている。現在は身体拘束に該当するケースはなく、玄関の施錠も夜間を除いてしていない。言葉の拘束について度々話し合い検討している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は虐待してはならない事をよく理解している。定期的に研修を行い、学ぶ機会を持ち、より一層の知識向上を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者・職員は研修会を行い、幅広い知識の向上を図っている。現在は成年後見制度を利用する方は入居されていないが、必要となれば対応、支援できる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者は契約時十分な説明を行い、理解納得して頂いて契約を締結している。また、不安や疑問点を聞き、説明し契約を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日々利用者、家族と会話を持ち、意見、不満、苦情等を早急に把握し、解決している。例として新利用者の家族から、コロナ禍である為面会の機会がないので、職員がどんな方なのか?という意見等にも職員紹介の便りを送る等して工夫している。	家族の要望から、職員が働いているいつもの姿で自己紹介したコメント入りの便りを送り喜ばれた。毎月の請求書にも利用者の様子を伝え、写真を添えて元気な姿を届けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議を行い、職員の意見や提案を聞く機会を持ち、運営に反映している。	日々意見交換できる場面は多く、会議で提案があれば職員全員で検討している。法人への要望は管理者から伝えている。管理者は、職員一人ひとりと交換ノートを通じて個人的な報告や意見交換をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各行事内容を把握して、必要である資金、人材等を支援してもらっており、管理者や職員が働きやすい職場環境に努めている。介護処遇も給与に反映している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の介護老人保健施設管理栄養士を講師に食中毒研修等、専門職による研修等を受ける機会を持ち、職員育成に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍である為、他施設訪問は今年度難しい為、グループ内の併設施設と相互活動を通じて、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	当ホームの見学面談の機会に、本人の思いを聞く態勢を取り、安心して話す事が出来ると安心感を感じてもらえるような雰囲気づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にも当ホームの見学時や面談時に、困っている事、不安な事、求めている事等を十分に聞ける機会を作り、受け止めるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族にとって、今どのような支援が必要なのか見極め支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家族の皆さんとともに、本人がより良い生活が送れるように、対話や共に食事をする等暮らしを共にする者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と本人の様子について連絡を密に取り、本人と家族が連絡出来るようお互いに電話で会話したりする等共に本人を支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	在宅サービスである事を念頭に置き、家族、友人、親戚の方々が自由に出入りして頂けるように支援しているが、コロナ禍である為、家族、友人や親戚に本人が葉書を出せるようにする等支援している。	コロナ禍で例年通りの馴染みの関係は継続できなかったが、知り合いに葉書を書いたり電話で家族と話をしてもらうなど家族との繋がりに配慮している。整髪については資格のある職員が支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	6人という少人数であり、家族同士のような関わりを感じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用終了後も、家族の訪問があり交流を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のコミュニケーションの中から、一人ひとりの思いや希望を把握して、よりよい生活が送れるよう努めている。	現在は利用者全員が思いや意向を言葉に出して伝えられるので、食べたい物ややりたいことなどを直接聞くことができる。職員と1対1になる夜勤の時、朝の居室掃除の時、入浴時に本音が出ることもあり職員で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	独自のフェイスシートを作成し、生活歴や暮らし方、環境を把握している。面会の度、家族にも協力して頂き、聞き取りも行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを知る上で、その人に合った支援をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の職員会議にて、モニタリング・評価を行っている。3ヶ月毎に本人、家族、必要な関係者と話し合いを持ち、介護計画を作成している。	6名の利用者のモニタリングや評価は、毎月の職員会議の中で担当の職員が中心となって意見を出し合い、更新が必要な時は随時家族・医師を交えてカンファレンスを実施し、利用者の現状に即した介護計画になるようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	受け持ち制により、気付いた点をチェックして全員でモニタリングを行っている。また、必要に応じて、新しい介護計画も作成している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の希望に応じて対応している。かかりつけの眼科等への受診、買い物等も支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員、ボランティア、文化、教育機関等の協力を得て支援に繋げている。コロナ禍である為、ボランティア訪問は難しいが、近隣の中学校と交流をはかる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	母体が医療法人井上内科病院であり、母体の医師の定期回診で健康管理が出来る。安心して適切な医療が受けられる。	入所時に本人・家族にかかりつけ医の選択が可能であると伝えるが、全員が母体の病院を選択される。毎週1回の定期訪問で利用者の健康状態を確認している。状態変化があればいつでも往診が可能であり、利用者・家族の安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は、日々の利用者の変化や状況を把握し、気づきを医師、母体の看護職に報告し、適切な受診や看護を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	本人、ご家族にとって、今どのような支援が必要なのかを見極め支援している。入院時、医師や管理者から十分に説明し、安心して医療を受けられるように支援している。また医療機関との連携を密にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご家族と終末期のあり方について話し合いを持ち、要望に応じて対応している。	過去には看取りもあったが、ここ何年かはない。終末期になり医療行為が必要になれば、病院や関連の施設に転居になるケースが殆どである。本人・家族の要望を聴きながらできる限りホームでの生活が継続できるように支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	独自のマニュアルを作成し、急変時や事故発生時にスムーズな対応が出来るように話し合いを重ねている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協働体制を築いている	当ホーム独自で地震を想定した避難訓練を1回、夜間避難訓練1回を行った。また同法人の合同避難訓練2回にも参加した。自治会長、民生委員さんの協力を得て、井戸山地区避難訓練にも参加させて頂く体制づくりが出来たが、コロナ禍で井戸山地区避難訓練が中止となった。	母体の関連施設と合同の避難訓練に年に2回参加している。コロナ禍で地域の避難訓練には参加できなかったが、ホーム独自でもいろいろな災害を想定して避難訓練を実施している。生活用水・飲用水・食料など備蓄管理ができています。	コロナ収束後には前回の課題となっていた地域住民との避難訓練に参加できるように地域への働きかけをして、お互いに助け合いができるような体制づくりを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄や入浴に関するケアには、十分な配慮を心がけている。人格尊重やプライバシーについても勉強会を行っている。また、呼称はさん付で呼んでいる。	日常生活の中で、危険が伴う針仕事なども危ないからと取り上げたりせず、十分に見守りをした上でやってもらうなど、助け合って生活しているという雰囲気を大切にしている。排泄の失敗があれば周りに気付かれないような配慮がなされている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々の力に合わせた自己決定に寄り添って支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの気持ちを大切に、個別ケアの支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	居室から出る都度、義歯の装着、髪の毛の整容、愛用している化粧品でお化粧をするなど支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの気持ちを把握し、希望を取り入れながら献立を決めている。後片付けは、能力に応じて職員と共に行っている。	地域住民から手作りの野菜が届けられると調理方法などを話し合い献立に加えている。外食ができないため鰻や好きなお弁当などのテイクアウトを利用することもある。おやつにみんなでどら焼きやたこ焼きを作り楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事量を把握し、能力に応じて食事、水分摂取介助をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを支援している。本人が使い慣れた歯ブラシ、気に入っている歯磨き粉、マウスウォッシュを使用し支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昼夜通して、一人ひとりのタイミングを見計らって、トイレ誘導、見守りを行っている。本人の体調状態に合わせ、布パンツとリハビリパンツをその時々に合わせて使い分け、支援している。	ほぼ全員が自発的にトイレに行くが、日常の時間の流れの中でタイミングを見計らって声掛けをしてトイレ誘導し、気持ちよく生活できるよう配慮をしている。1名が夜間にポータブルを使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	調理を工夫し、料理の提供をしている。レクリエーションの時に、ラジオ体操やリズム体操を取り入れたり、廊下歩行、ペダル漕ぎ運動に取り組んでいる。十分な水分補給に努め、乳酸菌やヨーグルトなど必要摂取量にも気を配っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日は週3回となっている。一人ひとりの希望、タイミングに合わせて、入浴中に本人との会話にも寄り添い、本人が楽しんで入浴出来るように支援している。浴室にも換気付きエアコンを設置し、感染予防に努め、入浴を楽しんでもらえる環境作りにも努めている。	浴室は広々としていて浴槽も深く、たっぶりのお湯にゆっくりと浸かれるようになっている。週3回の午後に、順番をかえながら入浴剤を入れて支援している。入浴拒否の利用者はなく、みんながお風呂を楽しみにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動に重点を置き、生活リズムを整え、夜間ゆっくり休んで頂けるように支援している。本人が自室にて、趣味をしながら休息する生活習慣も支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	定期薬処方や臨時薬など、薬局からの服薬指導、薬の説明書を頂き、職員は一人ひとりの使用している薬の目的や副作用、用法、用量について理解している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の様々なレクリエーション活動や、選挙時期の際は自ら投票する等支援している。一人ひとりの力を活かしたおやつ作り等を職員が支援しながら楽しんで頂いたり、気分転換等の支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍前はホーム全体で外出、外食する機会を持っていたが、コロナ禍は、感染予防を考えて、法人内にある桜の木でお花見をしたり、外食の代わりに好きな弁当を注文したり、当ホームの裏庭に出て昼食やティータイムの機会を設け支援している。	コロナ禍で地域に出掛けることができないので、裏庭で利用者の好きな魚を焼いて食べたり、おやつを手作りして日光浴を兼ねて楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	1名の入居者は、本人の希望、家族の理解でお金を所持している。家族の同行で受診や買い物に使用している。5名の入居者は、家族の考えを優先して所持していない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に電話を使用して頂いたり、手紙のやり取りが出来るよう、葉書や年賀状、便箋、封筒、切手、投函など支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は全て南側に窓があり、太陽の光が十分入ってくる。窓からは四季折々の季節を楽しむことが出来、心地良い空間の中、食堂の窓からは近隣の中学生の登下校の姿も見ることが出来る。また飼いい犬「萩」が利用者、職員、訪問者を癒してくれている。	日当たりのよい広いリビングは、家具や調度品などを家庭の雰囲気を感じさせるようにしつらえている。癒しであるペットのゲージも置かれ、いつでも触れ合うことができる。季節の壁掛けなどを職員・利用者が手作りしてリビングや廊下に飾っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	椅子や長椅子を置いて、利用者同士でゆっくりと会話出来る空間を設置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には馴染みの家具等を置き、本人が居心地よく暮らせる様に工夫している。	居室には、エアコン・ベット・洗面所・押し入れが設備されている。床に絨毯を敷き座って手作業を楽しむ利用者があったり、家族の写真や手作りの花などを飾る利用者もあり、それぞれ個性的な安らぎの場となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの持っている力を十分に発揮し、自立した生活が送れるように支援している。		